

せう、撫子などが咲いてゐます、ですから私は蔭の所に立つてゐたのです、私は目を移して足を見ましたすると、左の足の大腿部——水の當る部分がパーントシーナの淡い彩色で、その蔭影になる部分は、ウアルトラマリンとブラツシヤンプリューとの混色が極々、鮮明に現はれました、唯關節の最も大なる陰影のみが、矢張強いパーントシーナにライトレツドの閃でした、ここで十分餘も立つてゐましたらう、向の筏の上に遊んでゐる小供の聲がハッキリと聞えます

「あの人は何を見てるのだらう」

○今度は向ひ岸に渡つて積原に坐りました、私の地平線は殆ど水面に近いのです、

先の雲がいつしか東に立つて、虚穹唯何らの妨もありませんでした、白日は、意のままに振舞つてゐます、碧潭一里、水は夢みる兒の笑顔の様に、小い唇を動かしてゐます、蒼穹が靜な水に移りました、水面は鮮かなパールで影の部分がバイオレットに彩どられました、波も立たず閃もない、私は積原を東にホツ／＼と歩みかけました

それでは筆を止めますよ御免——（大和、石田桂雨）

### ○ みづのいろく

水は外物を假りて、多く趣をなす、溢流に橋の架する、亭樹の水に臨む、紅燈の水に映ずる、流螢の水面を飛ぶ、小艇の水に泛ぶ、漁夫の綱を懸す、兒童の綸を垂る、水禽の水を掠めて

飛ぶ、皆水に趣を添ふ。

影の水に映じて趣味あるもの、曰く帆影、曰く橋影、曰く山影、曰く塔影、曰く花影、曰く月影、曰く燈影、曰く雲影、曰く樓影、曰く鳥影。

聲の水を渡りて趣あるもの、曰く櫓聲、曰く鐘聲、曰く絃聲、曰く款乃、曰く笛聲、曰く禽聲、曰く擣衣聲。

夜雨一過、街上燈光滿地、吾此光景を愛す。

夜水は活氣なし、唯だ燈影の落村を得て、活氣あり。

（日本人第五百十七號、市島春樹）

### ○ 水はうつる影には二通りある

水の面には、一つの物體が同時に二通りの影になつて映ります。雨天の日などには、そんなことは有りませんが……否や！……あるのはたしかにあるのでせう、けれども太陽の光線が弱い爲めに見えません

例て一寸此の處に、一本の青々とした緑の木が池邊に有るとしますと、清く澄んだ水の面には見るから涼しさうな青々とした木の影が、漂ふて居ませう

普通畫には、この影のみしか、かいて有りませせん、然し氣をよく付けて見ると、もひとつと影が映つて居ます、その影は美しくは有りませせん。

ちよつと見た所では灰色をして居ます、この影は、人の影が地面に薄黒くつうつるでせう

あの影と性質は同じものです

そうしてその色彩を有した方の影は見る者の位置に従つて動きませんが、灰色の影は見る者の位置に依つて變ることは有りません、ただ太陽の地置によつて、太陽が東にあるときは西に、太陽が西にあるときは東にその位置を變じます、(福岡縣嘉穂園田正樂生)

## 關西洋畫界通信

(一)

紫 舟 生

沈滞し切つた關西の洋畫界も、近來時勢の進運に連れて、稍活氣を呈して來た様である、報告の材料も少くない、予はこれから、ボツ／＼通信を始める事にしやう、例に依つて順序も、統一もない、只見たまゝ聞いた儘を、拙い筆の向ふまに／＼、書き付けて行く事にする。

ミズキ會水彩畫展覽會を觀る、豫てから噂に聞いて楽しんで居たミズキ會展覽會が、愈々二月二十四日に、京都俱樂部で開かれた、東京と異つて滅多に洋畫展覽會を見る事の來ない、京都で而かも水彩畫ばかりの展覽會！予は胸を躍らしつゝ、足も空に駆け付けた。出品者拾二氏、大小合して約八十點、展覽會と云ふものに飢えた眼には、皆取り／＼に面白からぬものはない、抑もミズキ會とは、京都に於ける唯一の洋畫研究所たる、關西美術院の青年畫家中、水彩畫を遣る人々を中心として、組織さ

れた會である、但しこの會員の多くは、油繪の餘暇に、水彩畫を描く人達で、専門に水彩の筆を取つて居る人は、不同舎出身の吉田眞里氏のみである、吉田氏は實に京都に於ける唯一の水彩畫家である。

夫れは扱て置き、頭の新しい青年畫家の、責任ある眞面目な出品斗りとして、予は多大の敬意を拂ひつゝ、幾度も見て歩いた未熟なる吾等が批評などは、僭越の沙汰であるが、只自らの特に好きだと思つたのを、報告しよう。河合先生の「小豆島スケッチ」三點は別として太田二郎氏の「八瀬秋」は、小品ながらその潤澤な豊富な筆致が、畫面に溢れて、如何にも心地よいものであつた、予は場中でこの繪が一番好きであつた、國枝金藏氏の「秋の曇り日」「春の夕日」も亦氏獨特の綿密な、そして街氣のない研究的態度がよく表はれて、乍毎度敬服した、青木精一郎氏の「おくつき」も懐かしい感じに富んだ繪であつた、吉田眞里氏は相變らず大作が澤山出來て居た、予は之の内でも最も「お地藏様」を面白く見た、「高い處から」「赤い山」なども今でも頭に殘つて居る繪であつた、氏の作品には、何時も潑刺たる筆致に、巧みにパステルを混用してある、この行き方が、氏の特色であると共に、又欠點となる事があるかも知れない、二神徹也氏の諸作も、太平洋畫會の藤島英輔氏に似た筆致の、可成努力的な繪であつた、この外前川千帆氏の自畫木版は、甚だ佳趣あるものであつた、かくて予は充分の刺戟を得て、會場を辭した、水彩畫斗りの展覽會にして斯くの如く内容の充實した展覽會を見たの